

岩木山山行報告 (2019年6月22日～24日)

6月下旬には、このところ恒例になった「大人の休日倶楽部」の4日間フリーの切符を利用する大形山行を実施している。去年は「八甲田山・奥入瀬溪谷」に行ったが、今年は「岩木山・十二湖巡り」をすることで、三浦さんにご計画・宿の予約などをしていただいた。岩木山は「深田久弥の百名山」ばかりでなく山溪の「花の百名山」にも挙げられている。花は「ミチノクコザクラ」です。参加人数は天野・伊藤・神田（玲）・中島・松山・三浦・陽田の7名に「風の会」から池田・市川・伊藤・高橋・福田の5名の方の参加を得て、全部で12名となった。

往きは第1日目の宿である嶽温泉「山のホテル」のお迎えバスが、16時00分に弘前駅まで来てくれるので、それに合わせて皆さん各自東京を出発した。大方の方は三浦さんご推奨の「10:44 東京発はやぶさ17号」に乗車した。そして列車内ではいつもの大宴会、何人かの方は降車の時には既に“でき上がって”いたようだった。14時45分に弘前駅に着き駅前を探検しようとしたが、時間が少ないのでコンコースの待合い椅子で休んでいると他の方々も集まった。15時40分頃にシャトル乗り場へ向かうと、お迎えは既に来ていて、他のお客さんが乗り込んでいる、我がグループは点呼するとお二人いなかったが、5分ほど前にはお集りいただいた。中型のバスであったがほぼ満員で出発する。

やはり梅雨の真ただ中であり、北東北ではあるが天候は安定しない。嶽温泉へ向かう途中で小雨が降り出してきて、今後の天候を“暗”示している。16時40分に枯木平／嶽温泉の宿「山のホテル」に到着した。改装したばかりなのか、綺麗な建物だ。館内には津軽三味線の曲が流れていた。部屋に入った後早速風呂に向かうが、泉質は白濁した硫黄泉だった。浴室は日本三大美林の一つ、“青森ヒバ”を多用したもので、タイルや石と違って温かみがある（古いので香りはないが）。部屋には「旅の思い出」と題したノートが置いてあり、泊った方が感想を記入していたが、対応が親切だ、良かったという記載ばかり。誰かが「悪い記載があれば抜いてしまっているよ」とおっしゃる。でも、仲居さんは明るく、対応は非常によかったよ。

楽しみの夕食は山の幸が多く、特に、“マタギ”だった6代目館主の考案による「マタギ飯」は、山菜をふんだんに入れて炊きこんだご飯で美味しかった。かなり量が多かったので、明日の昼食のために”おにぎり”にしたいという声が聞かれたが。天野さんが「舞茸と鶏肉の土瓶蒸し」で「（土瓶の口が狭くて）鳥肉はとりにくい」を何回も宣伝、ダジャレをアピールしていた。“ダジャレの師匠”の三浦さんを追い越そうと必死。このところ三浦さんのダジャレはあまり聞かれなくなったので、追い越されるかも。食事の部屋は畳敷きの広間なので、座りにくいこともあったか、アルコール類も少な目で早目に部屋に引き上げた。

三浦さんの部屋に集まり、反省会ならぬ検討会。部屋の外は土砂降りの雨なので、明日はどうか大きな問題なのだ。三浦さんも若干弱気の発言、初めは「朝風呂に入ってそのまま次の温泉地へ向かおう」という案まで飛び出したが、結局「折角ここまで来たのだから雨でも、8時20分発のバ

スで八合目まで登り、その時の天候次第で頂上アタックをするかどうか決めよう」ということに落ち着いた。そして 22 時過ぎにお開きにして各自就寝した。

翌 23 日、朝起きてみると雨は上がっていた。5 時半過ぎに外へ出てみると、中年ご夫婦が登山口の鳥居をくぐって登って行った。まだ岩木山上方は霧の中、だが雲に切れ目がありかすかに青空が見える。7 時からの朝食を済ませて 8 時頃ホテル前に集合すると、更に雲の切れ目が増えて、岩木山の前峰が現れた。ここで、ここから頂上を目指したいという方が複数名居られた。ここは海拔：約 450m で、山頂は海拔：1625m だから、高度差約 1,200m 位ある。健脚なら 3 時間～3.5 時間で登れるだろうが、我がグループを全体的に判断すると、きびしい。戻りは八合目バス停から 13 時 50 分発に乗らないと、五能線で不老不死温泉へ行けなくなってしまう。最後は三浦さんの判断で、バスで八合目へ行くことに決定した。結果的にはこれが正解だったと思う。

バスには我々以外にも 7～8 名いて、上を目指す。「津軽岩木スカイライン」は 69 曲りもあるが、ほぼ真直ぐに上を目指している。定刻 8 時 50 分に八合目バス停（海拔：1,250m）に到着、まだ霧はあるが雨は無さそうなので、岩木山頂上を目指すことに決定した。皆さん衣服が濡れるのを避けて雨合羽を着て出発する。陽田さんと神田（玲）さんは観光リフトを利用して九合目まで行くので、ここで一旦お別れです。

9 時丁度に皆さん満を持して歩き出す。リフト脇の登山道はそれほど急ではないが、ひたすら登りの道である。歩き始めは足元にハクサンチドリが少し咲いていたが、そのあとはあまり花のない緑一色の単調な道となった。ところどころ樹木が途切れて見晴らしがよさそうな場所があるが、一面の霧に覆われて展望は全くない。あまり良い天気ではないが登山者はそれなりにいて、降りてくる人に聞くと山頂も展望は全くなかったとのことであった。また、追い越していく人に聞くと、6 時半ごろ嶽温泉を出発したとのこと、登山は早起きをしなくてはいけない。雨具は着用したが幸い雨は降ってこない。両側が灌木帯なので風が入らず蒸し暑くなってきて、雨具を脱ぐ人も多かった。

40 分のコースタイムを 45 分くらいで登ると、前方の一面霧の中にうっすらと木柱の標識が浮かんできた。「やった、山頂だ！」と早とちりをした人がいたが、ここはまだ 9 合目、リフトの山頂駅分岐であった。前方の落ち込む斜面には大きな雪渓が残っているが、一面の霧で全容はわからない。すぐ近くには「鳥海（とりのうみ）山」があるが、鳥海山（ちょうかいさん）とは違います。とりあえず一休みするが、吹き曝しなので風が強く先ほど脱いだ雨具や防風着を着用した。隊列が長くなっていったが、最後の人も到着して休憩後 10 時に出発した。この先は岩がゴロゴロするガレ場や岩場が続く、急斜面では手も使うようになる。少し上ると平らな場所に出て頂上は近いかと思わせるが、霧の先には黒い塊がそびえる。岩陰に小さなピンクの花を見つけてハクサンコザクラだと思ったが、後で陽田さんからミチノクコザクラだと教えてもらった。さらに岩場を登っていくと少しずつ空が明るくなってきた。岩のあちこちには黄色い小さな花が咲いている。ミヤマキンバイの群落だろうか。

岩木山頂直ぐ手前で、先行していた陽田さんと神田さんに追いついた（10 時 40 分）。山頂は大きな石がごろごろしているが割合広い。中央部にコンクリート製で真ん中に鐘が吊るされた“ケルン”が台座に乗っている。南側の崖のすぐ上に岩木神社奥社が鎮座していた。少しずつ天気が良くな

り、下界：津軽平野や日本海などが見えてきた。しかし、最後まで白神山の方向は雲の中だった。皆さん思い思いに昼食を摂るが、朝ホテルで納豆の入れ物におにぎりを詰めてきた人もいたとか。”ケルン “の前で登頂の証拠写真を撮って、11時30分早目に下りにかかる。

登りは大変だったが下りはもっと大変、滑落・転落に気を付けながら岩場を降りて行く。上から下を見下ろすとずいぶん急傾斜に見える。危ないところは後ろ向きになって、手足を使って下りる。時間はたっぷりあるので焦らずにゆっくりと下った。天気はどんどん良くなって、見上げると青空の下に岩木山の山頂が浮かび上がり、下を見ると緑の津軽平野が広がる。

12時30分に、リフト乗り場へ行く分岐点で、大方の方はリフトへ向かったが、天野、中島、松山のお三方はそのまま下って行った。ここから一旦登り坂をリフト乗り場へ向かった。途中の岩陰で「ミチノクコザクラ」の可憐なピンク色の花を見つけた。リフト乗り場はなんと海拔：1470mで「鳳鳴ヒュッテ」と同じ高度だ。リフトに乗って少し下ると足元には「ハクサンチドリ」の群落があった。12時50分、「八合目バス停」に帰着。直接下ったお三方も13時20分頃元気に凱旋した。飲兵衛組はビールを楽しみにしていたが、ノンアルコールビールしかなく、がっかりしながらも飲んでた。

今まで晴れていたのに、バス出発の13時50分ころからまた雨が降り出した。「後はバスに乗るだけだからいいや」などと言っていたら、嶽温泉に着いた時にはかなりの降りになり、また傘を出すはめになった。「人を呪わば穴二つ」です。14時20分ごろ嶽温泉バス停着、バスの乗り換えが10分しかないので急いでホテルに預けていた荷物を受け取りバス停で並ぶ。

14時30分に路線バスに乗り換えて弘前駅へ向かう。弘前駅改札口前で、ここから別行動をとる高橋さん、福田さんとお別れする。お付き合いいただきまして有難うございました。本隊の10名は16時08分発の五能線：「リゾートしらかみ 6号」に乗車する。

五能線は日本海に面した海岸を走ることのできる人気の路線だ。座席指定の「リゾート号」の海側座席はなかなか取れない。鱒ヶ沢駅～東八森駅間の約80kmが海岸沿いに走るので、海岸の奇岩・岩畳などを満喫できる。「リゾートしらかみ号」には緑色の「樺号（ブナ）」、赤色の「くまげら号」、我々の乗った青色の「青池号」がある。特に2号車はボックス席で向かい合う席の中央に“バーカウンター “があるというサービスがある。池田さんは2号車だったらしい。「4人のボックス席に一人で足を伸ばして乗っていたのよ」と。誰かさんは「なんで私の車輦には”バーカウンター “がないの」とクレームを付けていたとか？

そもそも今日の宿は黄金崎「不老不死温泉」に泊まろうではないかということで決まったのだが、この温泉、超人気でなかなか取れない！三浦さんが再三トライして、初め6名分きり無かった部屋が、後2名分確保でき8名泊まれるようになったが、どうしても2名分不足で、三浦さんと（貧乏くじの）伊藤（宏）さんは深浦市の「深浦観光ホテル」にお泊りいただくことになった。三浦さん有難うございます。お二人は深浦駅で下車し、残りの8名は18時36分定刻にウェスパ椿山駅で下車する。ここでも又ひと騒動、最後の一人がなかなか降りてこない、列車は出発できず車掌さんがホー

ムでブスッと待っていた。後で訊くとカメラの蓋を探していたとか。列車が遅延すると、運転手さん車掌さんは始末書を書かなければならない筈で、お気の毒なことをしました。御免なさい。

ウェスパ椿山駅前には「コロボックル物産館」という近代的な建物が建っているが駅舎でなく、駅舎が無い無人駅だ。駅前帯が「ホテル ウェスパ椿山」である。さて、我々はお迎えに来てくれた車に乗り込む。5~6分で「不老不死温泉」にご到着（18時45分、この時刻大切）。

従業員から館内、食事の時間、露天風呂などの説明を聞いてから、部屋に荷物を放り込み海岸の露天風呂に突撃する。日本海に夕日が沈むところを風呂から見ようという訳だ。今日は朝から霧や雨降りに悩まされたが、今は晴れ。19時5分前に露天風呂に行くと、丁度どやどやと風呂帰りの人に会ったが、露天風呂にはほんの数人きりいなかった。女性用は少し嵩上げされていて、しかも囲われているので見えない。今は男性用（混浴）も女性専用も同じ位の大きさらしい。女性には化粧のワンピースを無料で貸してくれるが不要ないだろう。太陽はちょうど水平線の直ぐ上まで降りて来ていた。薄雲はあるが“真っ赤な太陽”は間もなく海の中に沈んでいった。正に大自然の雄大なショーだ。感動に浸りながら、また手配していただいた三浦さんに感謝しながら露天風呂を後にした。

夕食は「百合の間」と言われていたが、なかなかたどり着かない、なんと“場末の”どん詰りの部屋だった。19時40分頃始まったが、今日はテーブル席だった。食材はほぼ全て地元産を用いている。お米は「津軽ロマン」という品種だそうだ。そして今「晴天の霹靂」という品種を開発中とか。ゆっくり飲もうと、ビールの他に、焼酎、日本酒、ハイボールなどのご注文があった。天野さんは効率的にと焼酎のボトルをリクエスト、一方松山さんは日本酒の「不老不死」という銘柄を見つけてこれをご注文。この瓶は四合瓶位だったが、松山さん「私は四合瓶では駄目、一升瓶でなくっちゃ」とおっしゃる。一升瓶をテーブルの上にどーんと置いて飲まない、飲んだ気がしないのだそうだ。昨日までは登山前だったので自粛していたのが、今日は下山後なので本性を發揮しましたか。適当なところで、一旦お開きにして部屋で二次会。もちろん残った焼酎、日本酒の瓶は部屋へ持参した。

今日の部屋は全てベッド2台の部屋だったが、反省会は天野、中島組の部屋になった。とにかく皆さんが岩木山頂上まで登れて、更に頂上では晴れて津軽平野、日本海も見えてよかった、よかったとの反省。嶽温泉から歩いていたら頂上まで行けなかったかもしれない。三浦さんの出発前8時時点での決断は正解だった。全て良い方向に動いて、百名山：岩木山の頂上を踏めたのだから。雲を追い払った天野さんの奮闘も大きかったかな。いや計画も良かったよ。お昼のお弁当の作り方の授業もありました。即ち、朝食の時納豆の小さな入れ物を空にして、中にご飯を入れて少し固めて“おにぎり”にする。佃煮、漬け物なども入れれば立派なお弁当になります。塩があればなお良い。輪ゴムを貰って蓋をすれば完成。ただしこれは納豆が小さいとお弁当にならないので要注意である。

山へアルコール類を持っていくことについての議論がありました。昔は山へ一升瓶を持って登ることが往々にしてあったが、やはり酒を飲むと下り坂で事故を起こす危険が大きく、避けるべきであろう。一人が事故を起こすと他の全員に波及するので、ビスターリとしては原則としては止めることにしています。“団体行動”である以上、リーダーに従うべきでしょう。神田さんが「昔の山の訓練ではリーダーの指示は絶対従うことが必要でした」と話された。

今度の中島さんが怪気炎で「毎晩飲むけどどんなに酔っばらっても必ず家に帰る、外で寝込んだことはない、家に入って玄関で朝まで寝てしまったことはあるけど。そして翌朝午前中は、昨日飲み過ぎたからもう飲みすぎないようにしようと思うけど、夕方になるとまたもや、さあ出陣！となり、結局反省していない」を繰り返して言っていました。松山さんは「飲むと話が止らなくなる。酔っばらって電車で乗り越したことは何回もあります」とか。“御三家”のもう一人天野さんは今日はすこぶるおとなしく、晴れ乞いのお祈りで精力を使い果たしたか、怪気炎はあまり聞かれませんでした。

翌24日、朝食は“ビュッフェ式”なので、一応7時頃にしましょうと決めてあった。さて食堂に行ってみると満席で、空席はちらほらきりない。うろうろしていると池田、松山、神田さんが現れた。そしてうまい具合に窓側角テーブル（4人席）がゲットできた。そのうち他の人達を来て、また席も空き始めたので、グループで座ることができた。今日の出発は10時頃なので、ゆっくり食事を摂ることができた。お昼の食事処は未知数だったが、今日は昨日学習した“お弁当”に挑戦する人は居なかったようだ。

我々は10時10分「不老不死温泉」始発のバスで終点：奥十二湖駐車場へ向かう。三浦さん達は十二湖駅からこのバスに乗り込むことになっている。バスは十二湖駅で超満員になった。

10時55分に奥十二湖バス停に到着。今日もどうも雲行きが怪しい、かすかに霧雨が降っている。雨合羽を着る人、天野さんを信じて合羽は着ない人などいたが、手荷物をロッカーに入れて11時に出発。左手に「鶏頭場の池（ケトバ）」を見ながら進む。約600mで「青池」に着いた。この池はお椀の底に水が溜まったような感じで、今は日差しが無く暗く沈んでいる。「青池」の看板の前でイスラム系か頭にスカーフを巻いた女性二人がおり、一人がビデオを回し、もう一人が池の説明をして録音していた。インドネシア、マレーシアあたりの女性だろう、国に帰って宣伝をしてくれるとは有り難いことだ。池を覗きこむように2層の手すり付き見晴し台がある。道はここから上に登って行き、広場に出ると東屋があった。

ここでこれからの行動を案ずるに、1.5km先の「金山の池」を目指すことになった。うっそうと茂るブナの自然林の中を進む。やがてブナ林の中の小道は結構な登り坂になって、「金山の池まであと1.2km」の標識の所で、陽田さんが引き返すことになった。本隊は先に進むと相変わらずブナ林の中の道だが高低差が少なくなってきた。「金山の池」には砂金が大量に埋まっているとか、この池を拝むと大金持ちになれるとか、与太話をしながら林の中を進む。青池付近は観光客で混雑していたが、こちらは全く人がいない。静かなブナ林を歩いて松山さんは大満足であった。

ようやく金山の池に到着、静かな湖畔に佇むが金目のものは無かった。大金持ちになる夢は破れたが、そろそろ戻らなくては。ピストンではつまらないので周回路を採ることにした。そのうちに雨が降ってきたが、ブナ林の下には雨粒がほとんど落ちてこない。長池は名前のおり細長い池だが、その縁を通過して迂回路を行くうちに道を間違えてしまった。分岐で左折せずに直進したところ、送電線鉄塔の巡視路に行ってしまった。かなり急斜面をエッチラオッチラ登り着いたら道は途切れている。

これはまずいと引き返し、何とか正しい道を見つけた。雨がだんだん強くなってきたので雨具着用し、陽田さんがお待ちかねだろうからと急いで戻った。

13時40分に分岐点の東屋に戻ってきて、“無事“陽田さんと合流して、すぐにバス停へ戻る。帰りのバスは14時15分発なので、最早落ち着いて昼食という訳にはいかず、軽食で済ますことになった。バスは15分ほどで十二湖駅に着いた。ここは無人駅ではあるが立派な駅舎があり、地元製品の販売所がある。お店の人が駅舎／建物の管理をしているのだろうか。まもなく陸続と「トラピックス」のバッジを着けた人達が現れて、発車時刻が近づくと幅の狭いホームは動きが取れない有様になった。2輛編成の列車が到着すると、押し合いへし合いの状態になり、乗り込んでも少し座れない状況。そのうち添乗員（女性）が来て、「海は右側ですよ」というと、トラピックスの人で左側の席の人達は右側のドアの傍などに移っていったので、我々は左側のボックス席2ブロックに座ることができた。ここから東能代までは70分もあるので、”立ちんぼ“はつらい。呑兵衛組は早速店開き。

発車するとすぐ奇岩の続く海岸線に出て、トラピックス組は歓声を上げていた。彼等は「十二湖巡り」をした後、五能線列車で「海岸の景観」を楽しむというのが“売り”だったらしく、海岸から離れる八森駅で、先行して待っていたバスに移っていった。ところで、もう一つ、天野さんが降りる直前の添乗員のおねえさんに、リュックの中でしわくちゃになった“柿ピー”の袋を上げていたが、彼女はそれをどうしたかな。「しらかみ号」ではなく、普通車でも「五能線の海岸を見た」ということになるんですね。しかし、深浦あたりの海岸線が一番良かったような気がする。

予定通り無事定刻17時27分に秋田駅にご到着。ここで本隊は三浦部隊とお別れとなった。秋田発18時16分の「こまち40号」では座席をばらばらに取っていたが、みどりの窓口で1ブロックに集中して座席を変更することができた。盛大な車内宴会になるかと思われたが、五能線車中で既に飲みすぎていたのか、おとなしくなってしまった。駅弁などを食べた後は、中島さんの世界経済や政治情勢に関するご高説を承りながら帰途についた。22時04分に東京駅について解散した。

いろいろと「想定内」「想定外」のことがあったけど、無事ここまで帰ってこられたのは、すべからく三浦さんの緻密な計画の賜物と感謝します。多分三浦さんは「想定外なんか無かったよ、全て織り込み済みの想定内だったよ」とおっしゃるでしょうね。目に浮かぶようです。

反省することが多少あったような気もするが、全体としては非常に楽しい山行・旅行であった。ご参加の皆さん、そして企画立案実行をお任せした三浦さん、ありがとうございました。

(伊藤)

『注記』 「ミチノクコザクラ」は岩木山だけに咲く固有種で、「ハクサンコザクラ」より一回り大きい。



2019.6.23 11:00 岩木山山頂



2019.6.24 11:33 十二湖青池